

吉村道明  
編輯

近世太平記四篇

上

5甲5  
3994  
10



伊5  
3994  
10

行  
下  
巳  
四  
冊  
卷  
四

近  
世

時  
審

四  
冊

吉村明道編輯

近世  
史記  
四篇

版權免許 東壁堂藏版

五十二  
五十二

太平

記

亦如篇

卷之二



近世太平記四編卷之上

目錄

- 一人吉口の官軍四十九瀬山を抜き一擧し日向へ入る事
- 一豊後口肥後口の官軍進入の事
- 一薩摩口官軍進撃 附リ 縣官人民を撫育する事
- 一華族伊達宗城四國へ赴く事 附リ 岩村權令縣會を聞く事
- 一國中の人民從軍を願ひ其外軍人を愛恤する事
- 一川路少將の軍鹿兒島へ連絡する事

- 一 川路少将歸京の事
- 一 官兵薩摩日向大隅に侵入する事
- 一 聖上西京より還幸の事
- 一 浅間艦日州外の浦に於て難船并豊後肥後口に官兵勇戦の事

近世太平記四編卷之上

大正六年一月十一日  
本校出版部氏贈

尾張 吉村明道 編輯

人吉口の官軍四十九瀬山を抜き一擧して日向へ  
入る事

昔晋國の杜預とつゝる人吳國を滅し時不當て言  
 事あり曰兵威已よ振り壁竹を破るが如し數節の後  
 刃を迎へ解く復手を著る所ありと是兵威甚熾あれ  
 其勢竹を折くが如しと敵兵之を防ぐは術ありをいふ  
 其扱も山田少将の一手八人吉城を陥しより其勢破竹の  
 如く賊兵も支う得ざる有様なりが少将ハ猶も此勢小



乗どく、賊兵を打破んりものと、六月十日より、支度を調へ、  
既よ其日小打出んとせしが、配兵の都合意外は手間どろ  
しを以て、其日先兵士を休め翌十一日午前六時頃人吉  
より東南の方へ押出し、先我一隊を三手分ち左翼の  
田代村邊より戦を始右翼は赤池村の邊より進み中  
軍は四十九瀬山より、シンシエ原まで進み其日の正午十  
二時頃より遂よ四十九瀬山の賊壘七八箇所を攻落せり、  
然るお此日大雨盆を覆ふ如くや、四方の山皆  
雲小鎖さき纜よ三四町を隔る、賊軍の射出せる銃烟  
さへも見えざりけむ、少将は軽々しく進入せざるを禁ど

り、暫あつて雨愈甚く河水も次第増加し、所よ  
りて板橋を押し流し、官兵の進退は不便なり、漸砲  
撃を止め、賊軍も亦戦を好まぬと見え、砲撃を止め、  
午後四時半頃に至り、全く満野寂寥とせし、砲聲は亦  
至り、翌十二日、昨日より引換たる晴天も忽官軍の勇進  
ん、賊軍は馳せ向ひ午前九時頃遂に賊の大壘を乗取り  
壘中の藁小屋に火をつけ、味方の勢を助し、賊は少く  
色めねども、我兵得たりとつけ入り、逃るを逐る益進  
鷹の巣山の麓より追行たり、此時朝野新聞社の探偵  
者高橋基一、東京の本社へ戦地の實形を報知せんが

為ふ此地へ出張し、山田女將の軍中ふあり、此日の戦争と目撃せり、其報知を左に畧記と、

今朝八時頃又々炮聲の起るを聞くと、已に戦の始りたるを知り、僕ハ獨歩行し、中軍左翼兵の背に出く、小高き山へ登り、遙か戦争の模様を望見せば、丁度官軍進撃の真最中なり、我炮壘より、賊壘小向く頻に破烈丸を放ち、歩兵ハ其山下の谷にひり、撒兵を以て進み、撃ち銃を放ち、進み進ん、又銃を發つ、其形況尋常の操練を見ら小異あり、其時賊兵も亦小銃を發て、随分堅固小拒に戦へり、又時々ヲコバ村の背に當る

山の半腹より、大砲をお出せらる、我中軍の左翼を退んと欲する小似たり、午前九時小至り、我軍遂に全勝を得、見る間小數町を逐行けり、此時僕も亦小山を下り、受ふ行く、數町あり、我砲壘小達し、此壘上より賊の走る有様を望む、二列小組を退くも、何れ散々おちり、逃るもあり、又地上小倒るる賊を、他の賊が打寄、杖け起し、負擔し、走りもありたり、其中に賊ハ已に戦地より、半里許り南なる、鷹の巢山へ引揚げ、官軍も愈烈に追撃し、山路小攻登り、様子も、銃砲の聲も漸遠く、遂に聞えざる故、余ハ賊壘の跡を閲せん、と

谷を渡り山を攀ぢ、此處彼處の遺壘に到り見ると大抵皆半月形に造り、前面及左右よりの攻撃を防ぐ様みじたり。中より背後に迄土壁を築くものありたり。云、官軍の息をもつべし。敗賊を尾撃し、一手にコバ村より薩摩へ出る本道を押し、又一手に鷹の巢山の間道を逃走する賊兵を追ひ、又一手に鷹の巢山の左あるシユツテウ谷とつる山路より進み、何れも岨岨たる山坂なりとも報國の一心盛なりとも、少も屈をば、十二日の黄昏より遂に肥後と薩摩の界なる山の絶頂に達し、翌十三日の早朝、日向なる吉田加久藤飯野の三個所を占得たり。此戦争

ゆく分捕たる物の玄米二百俵と鹽鮫若干、其外銃器を多く、銃器の中より火繩銃を多く見たり。又降服せし人員、凡七十七人計あり、五十有餘の老人もあまた、又十五歳不足らざる少年もあり、何も皆雨露に濡れ、日曝さざり、故皮膚甚黒く、見る目も憫然なりとのふ、

豊後口肥後口の官軍進入の事

前巻小説きたり、如く豊後口の賊、何も我軍艦及陸軍の爲に悩まざり、一支部もなき重岡へ引上げ、佐伯以北の海岸より一人の賊も見えざりけり。野崎中佐と堀江中佐の兵、六月十二日、佐伯に到着し、同所を占め、本營を抽



垣村お置き、猶諸口と謀ト合せ日向お入り、兇賊を追  
 拂さんとせしむ。賊兵二百人許り、遽ふ三國峠の本道より、  
 三重市口を襲ひ来り。故防禦の爲、其意を果さば翌  
 十四日、賊兵退去せしむ。中津牟礼口の官兵、奥畑  
 迄進み、三國峠口の兵、阿蘇山迄進み、葛葉口の兵、此嶮  
 道の左右より進み、別ふ兵を分ち、賊兵の背後より出、前後  
 三方より攻立り、忽ち、賊を追退けたり。翌十五日  
 の旗返し、三國嶺の両道より進み、三國の山界を奪ひ  
 取り、賊壘と距る事、五百メートルの所、壘壁を築き固く  
 守備を整もり、十七日午前三時より、遽ふ進撃を試み、

が賊兵、遂ふ支まじく、重岡街道の方へ遁と去まり、此戦  
 あり、我軍は負傷者一名あり、分捕り小銃及彈藥若干  
 あり、旗返しより進み、官兵は勝利を得、尾の市まで  
 進入せり。猶勢を乗じ、重岡は進入せんとせしむ。賊兵は  
 千束村川尻村の兩村に於て、嚴重な防禦を設け、を以て、  
 官兵は取敢は、重岡より一里許り手前ある山の上、警  
 備を張り、敵の動靜を伺居り、然るに二十一日の朝、至  
 り、遽に斥候の兵返り來り、告るや、賊は昨夜重岡を引拂  
 て、延岡又、隈田の邊へ引去まり、と我兵は之を聞より、直  
 様重岡へ進入し、赤松嶺に精兵を備へ、日向、豊後の國界

と固く守り、此時賊兵の方より、豊後路を破る、四國を  
押渡り進で京坂に迫り、一舉して思ふより、志願を達せ  
んとせしが、豊後口へ却る官兵の爲に打破らる、人吉口へ  
薩州の界まで追退けらる、兵勢日々挫く、唯滅亡を待  
のみありけり、賊将等は大に氣を尖だち、何如しして  
復び重岡の口を打破んものと、一同商議を竭し、二十四日  
午前六時、精兵を率ゝ、赤松越本道と外二口より豊後  
路を打て、出不意に重岡の官軍を襲ふ、官軍の方こそ  
不意の事あり、大に狼狽し、已に危く、重岡を棄て退  
んとせしが、将校兵士等忠憤の志撓まを、此を先途と戦ひ

しを以て、辛く賊兵を追退る事を得たり、此日の戦争は、  
午前六時より午後六時迄終日の大戦、敵味方の死傷  
最多、翌二十五日未明に官軍へ進み、勝地村まで攻入り、  
賊兵は延岡に迫らる事と懼き、必死を究る官軍は抗敵  
し、官軍大に利を失ひ、勝地峠まで引揚る、然るに賊兵  
は益勢を得、勝地峠の後を断ち、前後より夾ぐ攻立け、  
官軍復び利を失ひ、苦戦して退き、同日午後八時よ  
至る佐伯に在る官軍の二中隊大に奮て、敗軍を助け、翌  
二十六日及び再び勝地峠を奪ひ返せり、此戦争は於て  
味方の死者五十五名なり、又肥後口より日向

正徳六年己巳四月 六

の延岡は向ひ旁豊後口の官軍と相應援するの一隊ハ、  
勝地峠の賊勢甚熾して豊後口の官軍數苦戦を以て延  
知り、賊の兵勢を分たしめんが爲め六月二十七日を以て延  
岡口は侵入し、兵を兩道に分て一は赤松口より進み一ハ  
サルケヤ峠より進み直る赤城峠を攻んとせしが不意に  
敵の壘壁は近きところを以て戦を挑たせども日の暮るを  
以て戦少く由り一旦兵をサルケヤ峠の前面より引  
揚り、七月二日午前四時三十分は再び兵を三道より進  
め一方は楠原口一方は中村より一方は尾楠より侵入せり、  
楠原口より進み兵は特は苦戦ありしが同日十二時より

遂は高千穂第一の要害を占取り、其餘賊壘數十を陥  
あり然れども地形不便なるを以て尾崎村迄引揚げ嚴重  
に守備を張り、此戦より分捕する品は大砲一門小銃數  
十挺彈藥糧米等なり、此手の官軍は猶も延岡へ向て進  
入せんと欲せしが漫は獨り延岡へ突出せりとも、相援る兵  
あき時、互に味方を損をばしと思慮し、豊後口の軍の  
進むを待て、共は延岡へ入んと決議せり、此は憫然ある話あ  
り、今更用なきを以て、其概畧を以て先は賊軍が臼杵へ  
亂入せりとの聞えありしとき、同所の士族は官軍よ力を戮  
せ、賊を撃んと決議し、奮て賊軍を侵突し、忠勇を顯



江世大平言

師範學校の  
長官麻生氏  
賊中ふ於る  
横死の圖



江世大平言

セーグ衆寡敵せずして多く討死せり中より麻生貞樹氏に  
 不幸うろく賊小生捕まひ賊徒の之を降参させんとす百方説  
 き勸これとも固く義を守り屈せざる遂に柱縛つけられあふ  
 り殺せらるる然も死に至る迄賊を罵り止ざり  
 一といふ此麻生氏ハ師範學校の長より大分縣下より  
 高名ある人なり嗚呼惜むべし悲むべし

薩摩口官軍進撃 附り縣官人民と撫育する事

扱も水俣口の官軍ハ六月五日鬼ヶ嶽を取ん事を謀り前  
 夜より松尾上原の半腹に兵を伏せ拂曉に賊の不意を  
 伺ひ遽に打く出一時間程の劇戦より難なく鬼ヶ嶽を奪

ひ取り併に松尾上原の賊壘十四箇所を奪ひ取ると然  
 る小松尾上原ハ地形廣漠として少人数を以て兵線を張  
 り難けむ鬼ヶ嶽の守兵を残り餘ハ皆引揚り其  
 日午後一時過に賊兵ハ官軍の空虚ありと伺ひ再び襲来  
 る松尾上原の壘を取返し且鬼ヶ嶽の守兵は向く烈  
 く銃丸を發ち一舉して鬼ヶ嶽をも取返さんとセーグ官  
 兵ハ固く守り動かぬ其夜直に本營へ告げ遽に官兵を配  
 布り翌六日朝霧に乗じて山を攀登り遂に賊の砲壘より  
 一ツき一時に喊を揚り小銃を亂射せし賊兵ハ大に驚  
 き取物も取敢ば小川内をさして引退けり是時官軍の方

みくへ十四箇所の賊壘を壊崩し、賊の再び来り襲撃を志す  
要害を取拂ひ、翌七日より賊兵木野街道より来り、我  
兵の横合を突し、官兵ハ三手よ分せし之を防ぎ、戦勝て  
小川路より八町餘も賊兵を逐退たり、此日三浦少将の手  
も葦野の前面ある賊兵を逐退け、薩摩肥後の界ある大  
界といふ所まで進み、翌八日にも續く攻撃せし、賊兵ハ小  
川路を捨く、大口よ奔り、山之町の近傍ある要害よ守備  
を爲せり、味方も小川三村よ臨み、守備を張り、将は大口よ  
突入せんとせり、十三日よ及ぶ、水俣の官軍、川路少将の  
手ハ第三旅團、三浦少将の兵と隊を合せ、進み山野を攻む

三浦少将の手ハ左より進み、川路少将の手ハ右より進み、午  
前七時よ戦を始め、往々賊壘を陥し、遂に山の町よ討入  
り、折あり、三浦少将の手も来り、く復之と兵を合せ  
て、賊兵を逐ひ、大口街道迄進たり、十八日よ、午前第六  
時より賊壘を攻撃し、小木原牛尾平泉やぞ、戦線を進  
め、午後六時よ至り、戦を休む、此日左翼の兵ハ高隈山の賊壘  
を突んとて、道もなき嶮岨を攀ち登り、辛くとく八合目迄登  
り、詰し、賊兵も豫く用意せり、や、巨石大木を投うけたり、  
障碍も者あきよ、登り兼る險路も、飽くまで艱難  
を窮め、うへ山の上より轉ぐ、大石ハ山石角よ觸れ、破裂

一、四散し頭上は落来るもど憐むぐ一倔強の勇士も多  
く支那を打碎くれ適一命を助くり一者も重傷を蒙ら  
ざる事なく、多人數皆枕を並く溪底に墜入り其死骸ふ  
得る事能はさり一ハ無慙ありける有様なり、明は十九  
日、午前第三時より、官軍大雨を冒し進撃し左翼の兵と  
して、再び高隈山に向り一め一兵士ハ前日の耻と雪んと  
大石の落來ると、右へ潜り左へ避け無二無三不攀ぢ登るよ  
と見えしが、忽銃鎗を振る賊壘は跳り入り、賊兵許多と  
突伏せつ、難なく此壘を拔取し、最も華々しき大快  
戦もてそ有ける、此勢に乗し官軍ハのよく進く諸壘を

陥せしが、賊も亦盛り返し一度々斫入り一時ハ官軍を惱  
まども、遂は大口を打破られ退く大口の近傍を守り、官軍  
ハ猶も進く大口の賊を逐拂ひ尾撃し一里許りも進  
し、日已は暮るを以て哨兵線を一ヶ所坂の手前を張  
り、戦を休たり、此日の戦ハ實は近日比類なき大激戦を  
大砲彈藥の分捕甚多かりしといふ、二十日ハ遂は大  
口町を畧取し、出水の官軍と連絡を通し、生捕七名と其  
外分捕も多かりし、官軍の大口町を侵入せし時賊ハ  
狼狽し逃去るを以て、宿札等ハ其儘遺り、其名前  
を見ろふ多し熊本縣の士族あり、大口町ハ可ありの土地柄

近世太平記 卷之四

ろく、士族屋敷最多く是より鹿兒島へ十六里あり、此地より  
 新納武藏守が城跡あり、其地形最堅固あり、官軍の本  
 營ハ第二第三の旅團とも、本日此地に移されたり、二十一日  
 又左翼の兵ハ阿久根の賊と追拂んが爲め前夜又兵を中  
 野口迄進め午前四時又進撃し、阿久根を攻入り難なく  
 賊兵を追拂へり又右翼の兵ハ出水より宮の城を向く進  
 撃せし、賊ハ仙代川の向岸に在り死力を盡く防禦し  
 我兵二十餘名を斃せり然れども遂に奮戦し、賊と逐  
 ひ進ぐ宮の城を陥し、本日日本營を此所より居たり、是時  
 當く鹿兒島縣官石井内務權大書記官ハ本日大口町へ

出張し、元戸長の役所を旅館とて、鹿兒島縣出張所の懸  
 札を出し、假し地方官の事務を取扱ひ、當地の人民  
 ハ皆何つゝ逃去し、一二の婦女子のみ、男子ハ未だ一人も歸  
 来らざる故に鹿兒島縣出張所の事務の着手をばさなく、  
 縣官も殆ど退屈せり、併し縣官は隨行せし、巡查ハ何  
 も薩人より能く土地の案内とも知らん、手と分り、諸  
 方と奔走し、忽六七名の土人を連れ来り、郎内の掃除等  
 使役せりとのふ、土人が斯の如く官軍を懼れ、逃去し  
 所以と聞くと、始め賊兵が此地に在るとき、土人と欺て云  
 るや、抑今度官軍の来るは、凡て薩摩一國の人民を殺さん



が為ありと言ひ聞せしより土人皆山林に身と隠せし  
あり往々土人の歸り來るもの官軍の内は薩摩人の打  
交りたるを見く貴官方も官軍の中よりさるりと始て欺  
せしる事を發明せし様子ありしは是蓋し賊兵等が  
人民を強服せしめんが爲に設けたる窮策ありしは是時  
出張所より近村へ左の布達ありたり、

此度西郷以下の者ども謀反を企て、天朝に必向ひ  
致ししるものき誅伐せしむる爲に數多の官軍を差向  
けらるる者なり然るも罪なき人々も於ては決して  
御構とれ無きのみあらば焼くる家飢くる人民も夫々

御救の金や米杯を下し賜は候事故よ、天朝の思召  
を難有思ひ銘々住所に立歸り御救の金穀を頂戴可申  
且植付の時節故決して怠らば農業は精を出し可申事、

鹿兒島縣

右の如く揭示し上縣官に猶近村へ出張し山林へ潛  
居る土人等を尋出し大義を説き聞せし皆住宅に歸ら  
しめ且兵火の爲に其家を焼きたる者も小屋掛料と  
く金拾圓を與へ窮民に至るは差當り十五日分の米穀を  
人數不應しく救助されける土人等始て朝意の忝き  
事を知り皆落涙し天恩を拜謝せり此の如く是る事、

五ヶ村いづれ及およけよるる最早いちばん其事ことをま近鄰ちかにつ傳つたへる人心こころ大おほにお安やす堵とせりとのふ斯ごとく二十一日いちにちは宮の城を畧取とりて後のちハ別段べつ劇げつを戦争せんある事ことあらし二十三日にちの午後ご一時いちじハ官軍くわんハ新田しん八はち幡ばん宮みやの前より八町まち許ほど下くだ流りに沿ひ仙代せん川がの淺瀬せと渡りて遂ついにハ賊壘しやくを陥たり然るも賊しやくハ引退ひきく氣色いきもなく仙代せん川がと前よりハ嚴重じやうに防禦ぼ線せんを張りしるハ我われ軍ぐんもくハ舟橋ふね浮うき橋はしと造らり又またハ筏を組立くみたり其その渡わたりを方かた畧りやくの評議ひやうぎ中ちゆうより探り打の炮聲はうハ日々た絶たえれ共とも先ま休やす戰せんの姿あり

華族伊達宗城四國へ赴く事附り岩村權令縣會

を聞く事

一いつ犬いぬ虚きよと吠きる萬まん犬いぬ實じつと傳へ果ハ世間せ中ちゆうの騷擾さうじやうとあり其その所ところ以もと知らびして切きりハ動どう搖ようする事千せん古こより其驗けん少すくらも爰こゝハ川路が少すく將しやうの手より六月八はち日にちの戦争せんハ分捕ぶんせし書しよ類るい中ちゆうハ高知たか縣けんより使を来り日向ひき桐野の利り秋あきハ面會かいせし人ひと々々ハ高知たか縣けんの藤吉ふじ靜しやう村むら松まつ正せい勝しやうの兩人にんなりといふ事ありしを以て川路が少すく將しやうハ直様ちやく西さい京きやうの行在ぎやう所しよハ報告はうせしる所よりハ左ひだりの如く御布ご達たつありしる鹿兒か島じま縣けん下かたの賊徒しやく大だい分ぶん縣けん下かたへ散亂さんし追々お四し國こく地ち方かたへ遁走とん可か致し哉やの聞も有之あり付くハ伊い豫よ土と佐さの海岸かいハ豐

後日向近接の地方より今般別々々右沿海諸港出入の諸船陸海軍に於て嚴重に取締可致候此旨布達候事

明治十年六月七日

太政大臣三條實美

右の如くありけり其風聞漸次は諸方より延蔓し其噂と  
りぐあく中より土州に於て戦争始りしといふ者もあり  
又薩州の賊は已に四國へ渡たりといふ者もあり四方の  
人々手は汗を握り豊後の官軍が向背は敵を受くるかと  
危し者も亦少くなく人々皆此の如くなりしといふ舊伊  
豫守和島の太守伊達宗城は舊藩士が方向を誤らざる  
様説諭を加らんが爲に西京より守和島へ赴かれ

り其外又人氣の動搖せる一原因は立志社の社員内藤  
好静村松政克の兩人の竊に薩賊と通ぜしと見え高  
知縣へ出張せし東京の警視隊が此兩人を捕く六月十七  
日、大坂へ護送せし故と又其外兼高名ある片岡健吉  
が建白書を持参し西京の行在所へ行き直に太政大臣  
に面謁し請たる故と傳聞誤謬せしあり抑此片岡健  
吉が西京へ上り建言せし理由は第一廢藩の公論は出さ  
るを論じ明治八年に詔ありし大權確立の趣旨貫  
徹せざるを論じ士族の處置其當を得ざるを論じ人民は  
血税と賦課を多の不可ありを論じ朝鮮の處置台蕃征討擧

太交換等の非と論じ、其結末に至り、民選議院と設立せん  
 事と論じ、る者も一、條とて、現今薩賊の事は管する事か  
 一、去か、方今戦争の最中、其事の行ひ難きを以  
 ぐ太政大臣始め、参議并、尾崎大書記官、於、片岡氏  
 の請を許さん、ざりき、片岡氏、尾崎大書記官、面會と遂  
 たり、六月十二日の事あり、愛媛縣權令、岩村氏、管下の  
 人民、此の如く、民選議院と設立するの志切あつと知り、  
 去、明治八年三月、町村會と開き、尋、同九年七月、  
 區會と開、れ、今、又、更、人民の願意と満足せ、併  
 せ、後、來、本縣の幸福と開、ん、が、爲、當、今、戦争の最

中、あれども、遂、六月二十二日、於、縣會と開、れ、此、縣  
 會、人員二萬人、よ、つき、代理議員一人の割合、あれ、ば、縣下  
 の總議員、七拾名、あり、六月、第二の金曜日、と、以、會と  
 發、き、當、分の内、松山學校の内、明教館と、以、議場と、定  
 め、岩村縣令、發、會、開、業、の日、於、左の如く、演說、せ、ら  
 れ、  
 夫、公、同、の利益と圖、んと、欲、せ、ば、衆議輿論、は、基、り、ず、ん、ば  
 ある、可、ら、ば、苟、も、衆議輿論、は、基、んと、欲、せ、ば、廣、く、之、を  
 衆、庶、に、諮、詢、せ、ざる、と、得、ば、此、會、議、の、已、む、べ、ら、ざ、ら、  
 所、以、あり、某、之、と、本、縣、に、承、け、夙、夜、黽、勉、縣、治、の、易、々、

らざらむと思ひ深く衆議輿論を望む所あり是明治八年  
 第三月より町村會を開き尋ぐ同九年第七月より區會と  
 開く所以にして各員の親く知る所あり今茲は本年本  
 月本日を以て是縣會を開き衆議輿論を盡さるる本  
 縣一般の洪益を圖んとす抑議會は其土地の主腦より  
 一般の幸福を増加するの要務ありといふども若其  
 議事公平を基とせしむ偏は其形を摸し其名を衒  
 むのみ止らば之が爲に却て開化の進歩を防げ一般  
 の洪福を傷害するに至んとす庶幾くは各員宜く此  
 意を了し専ら一般の洪益を悃誠明審して敢て其

本分の責任を辱めざらん事と是固より其の各員は望  
 む所ありて各員の撰擧者は對して期する所も亦應は  
 り出ざるべし然るに則本會を以て將來本縣一百三十餘  
 萬人の洪益福祉を期す可くして其の縣治上は望むの意  
 と茲は於て始めて達する事を得べし

明治十年六月廿二日

愛媛縣權令 山岩村高俊

四國の景況は世人が心配する所といふ大に反對し一二の  
 頑固連中の薩賊は涎を流したる者もありと雖も上等  
 高才の人々一人も動搖するの色なく縣令が盡力より由く  
 民権の次第は盛大に赴くを悦び已に居住する土地を以

く日本第一の開明國と爲ん事との力と竭せり、ちかのみ  
たうらび宇和島の士族ハ萬一薩賊が此地へ侵入せし時  
ハ、海陸軍の保護と仰ぐべきハ勿論あり、吾郷里の  
保護ハ人民皆自爲すべき條理あり、とて、縣廳へ伺濟  
の上、皆々誓約を結ぶ政府の保護と助んとあせり、伊達宗  
城君も一旦宇和島へ赴くれしが、案外ハ人氣も穩ま、其  
上舊藩士が皆能く政府の爲よ盡力するを見、大に安  
堵喜悅せり、六月廿七日ハ西京よりと歸らむけし

國中の人民從軍を願ひ其外軍人と愛恤する事

西陸より事を起し、入々の心より、當時の人民一同  
は政府と怨み、剩へ全國人民の三分一なる士族ハ一旦封建の  
制を解かれ、手熟ざる商法或ハ農業よ手を下そと、い  
とも皆多し、半途より、瓦解し、其勢軌中の水よあ  
る魚の如く、今もも餓死せんとする有様なれば、吾等が義  
兵と擧ぐる上ハ、皆大旱の雨を望むが如く、簞食壺漿一  
く、我師と迎へ、刃向ふ者ハあらざるべし、と、自周の武王よ  
擬し、意氣揚々と謀反と企て、義氣よ長くる我國の人  
民何ぞ一時の甘口よ乘せられんや、當時一般の人心ハ漸く封  
建の非なるを悟り、四民一般よ自治の精心を起し、全國の  
力と擧ぐ、以て外國よ抗せんと欲する程の勢ハあれば、無

近世大正言  
氣無カある小人の外ハ敢ク西陲の暴動と悦ぶ者あらば  
無氣無カの小人の縦令數百萬人暴徒と與せると云とも  
固より數蚊の屯聚をるが如くあれは之を撲殺ん事も  
亦容易うござし幸よくて無氣無カある小人少く皆正  
義と唱く王師よ加えらん事と企望し諸國より馳聚る  
者日よ陸續と〜と絶る事あり其外國益よ力を竭せ  
者も亦多し今暫く六月中旬より七月上旬に至る迄の事と  
りて書集く人心の方向と誤らざり〜一端と觀さんと  
爰よ舊南部藩知事南部利恭君の親岩手縣へ出張し舊  
管下の士族へ左の通り告諭せり、

今般岩倉右大臣殿の内命よ西海の賊徒征討の官軍長  
陣よ相成且暑氣よ向ひ候よ付別段巡查を召募し新撰  
旅團御編成の御内諭よ候依之其許舊藩岩手秋田青  
森三縣下より舊臣不少候趣故年来の情義を以て親募  
よ應一候様説諭可給其段ハ三縣令より可申遣旨懇々預  
御依頼候天下安危の秋よ際一固より傍觀可致し無之  
特よ此度の儀ハ專舊藩々各自一手の働可被仰付御  
合よ有之仙臺秋田津輕等より志願可相成間地方官  
の募よ應ト上ハ皇國の鴻恩と報ト下ハ國民の義務と  
盡一候様數代の舊好を以て偏頼入候也

近世大正言  
卷之十一

明治十年六月

從五位南部利恭

又舊弘前藩の參事たりし西館某ハ舊藩主津輕君の書状  
 と齎らり歸縣し舊藩士より出兵の事を説諭たり又舊會  
 津の藩主松平容大君の家令澤全信ハ戊辰戦争の際適他  
 所ありし主君の籠城を聞き千辛萬苦し官軍の  
 中と潜り行き一散し馳歸り忠憤の涙と共に歸順の説と唱  
 へ遂に主家と全くせし功勞ありし人ありける此度  
 松平容大君の命を受け福島縣下若松に到り是亦舊藩士  
 と集り西陞の討手に向ふき昔を述べり又尾州犬山の舊知  
 事成瀬正肥君ハ舊名古屋の藩知事たりし徳川慶

勝君の委任を受け六月十七日は愛知縣下名古屋に到り  
 左の説諭を出し舊藩士族と召募せり

西南の賊徒迅速不及鎮定 御駐輦深被惱 宸襟  
 候旨拜承仕不堪恐懼候就夫今般成瀬正肥殿へ及依  
 頼次第も有之候付諸士委曲承容有之度事

六月十日

徳川慶勝

西陞の賊烟未だ鎮定の報を得ば累月 宸襟と惱せら  
 せ候條實は臣子の傍觀をきよ非ぞ正は粉骨碎身の秋  
 たり今度新撰旅團御編制に付更に報國士氣を興起  
 し上り 睿慮と安下り萬民の疾苦を解勸を東



西の四民編入の多き皆人の見聞する所あり付て

朝廷へ對し、二百年の舊縁難黙敢く憤發と内諭そ

ぶき様從一位殿の依頼より傳達如斯く仰願ふ諸

君憤勵あらん事と

明治十年六月

成瀬正肥

右の如く諸方の華族思と焦し身と勞し説諭せし

く豫く王師よ加り出兵と望たりし士族あれば我後

と皆從軍と願出たり尤舊藩主の説諭と待びし自ら

奮く出軍と願出たる者も亦多數ありといふ先六月十一

日より、青森縣より六十二人、石川縣より三十五人、山形

縣より百二十六人、參著せり、椽木縣より八宇都宮壬生

大田原吹上足利烏山等より百餘名、同日より福島

縣より二十四人、新潟縣下越後の高田より百四十六人、同十

六日より宮城縣より四百人、岩手縣より百五十人、埼玉縣

より八十四人、同日より静岡縣より五十五人、茨城縣よ

り十八人、長野縣より二十四人、又越後の高田より四十四

人、此中平民二人あり、同日より新潟縣より三十五人、

岐鼻縣より五十三人、山梨縣より三十四人、同日よ

り石川縣より十五人、山形縣より五十五人、福島縣より

六十三人、同日より新潟縣より十七人、佐渡國より

十三人又秋田縣より鈴木惟孝関貫一の兩人が二番組二  
番組の兵士合く百六十人を引率し著京より同二十  
九日より新潟縣より九人秋田縣より八十人群馬縣より  
五十八人七月一日より群馬縣より四十九人長野縣より二  
十三人同日より秋田縣より八十人同日より新潟縣よ  
り二百八人静岡縣より七十五人山形縣より十七人同六  
日より静岡縣より百人神奈川縣より二十五人斯の如  
く續々と絶ざりけり其中は舊會津藩の平荒川一郎  
ハ爾來戰地へ出張せん事と待と雖も暫く何等の沙汰な  
きより夫る廿三日速に戰地へ出ん事と願出たり又越後

高田の人々ハ皆官途と辭し徒軍と願出たりとの其外  
又大なる仁術を施し人々大給恒佐野常民の兩氏よ  
く博く官兵の傷死を救んが爲は博愛社と設立せり其  
次第左の如し是ハ五月中の事あれども筆の序は記せしゆのあり  
博愛社設立の願書并規則  
余輩此惨烈ある戰時に當り聊々報國慈愛の義務と  
取んと欲し別紙の通征討總督本營に願ひ出せ處速  
に其許可を得り由り四方の君子右の主旨と衷情とを  
洞察し厚く協參あらん事と冀ふ

明治十年五月

大給 恒

佐野常民

別紙願書

此度鹿兒島縣暴徒御征討の儀、實に容易ありき  
 る事件より、開戦以來既し四旬を過ぎ、攻撃日夜を分  
 らべ、官兵の死傷頗る夥ある趣、戦地の形勢逐次傳聞  
 致し候處、悲惨の状誠し傍觀をりしに忍ざる次第に  
 候、抑死者の深く憐むべしと、いへども生に復する法  
 あり、唯傷者の痛苦萬状、生死の間より出沒をるを以て、  
 百方救濟の道と盡そ、事必要と被存候固より、政府よ  
 於に看護醫治の方法整備す、雖も連日の激戦創

瘡の者漸く増し、自然御行届相成無候場合も可有之  
 と料察致し候、聖上至仁大に宸襟と惱させ給ひ、屢  
 慰問の使を遣りされ、皇后宮も亦厚く賜ふ所あり  
 くら由臣子くら者感泣の外あり候就くら私共此際  
 より臨み、數世國恩に浴したる萬分の一と報せん爲め、  
 不才と願ひ、一社と結ぶ博愛と名け、廣く天下に告ぐ、  
 有志者の協參を乞ひ、社員を戦地より差し、海陸軍醫長  
 官の指揮を奉じ、官兵の傷者と救濟致し、一度志願し  
 有之候、且又暴徒の死傷に官兵は倍するのみあらば、救  
 護の方法も、不相整正の言を俟び、往々傷者と山野に

倭一雨露暴く收り能はざる哉の由此輩の如き大  
 義と誤り王師を敵と雖も亦皇國の人民より皇  
 家の赤子より負傷坐して死を待者も捨く顧さる  
 人情の忍ざる所は付是亦收養救治致し度御許可有  
 之候り 朝廷寛仁の御趣意内外は赫著せらるる  
 あり感化せらるるの一端とも可相成候 歐米文明の國  
 へ戦争ある毎は自國人の勿論他邦よりも或は金  
 と賂し或は物と贈り若くは人と遣し彼是の別あり  
 救済と爲を事甚勤るの慣習あり其例は枚擧げ暇あ  
 らば候此件の儀は一日の遅速も幾多の人命に關し即

決急施と要し候は付何卒丹精の微意御明察至急  
 御指令被下度仍く別紙社則一通相添此段奉願候也

明治十年

議官

佐野常民

同

大給

恒

征討總督二品親王有栖川熾仁殿

別紙社則

第一條 本社の目的は戦場の傷者を救ふあり一切の  
 戦事ハ曾く之は干せざらん

第二條 本社の資本金ハ社員の出金と有志者の寄附  
 金とより成る

第三條本社に使用する所の醫員看護病夫等ハ衣上の特  
別の標章と著け以て遠方より識別するに便ぞ

第四條敵人の傷者と雖も救ひ得べき者ハ之を收む  
べし

第五條官府の法則に謹遵するハ勿論進退共ニ海陸  
軍醫曹長官の指揮を奉じべし

右の如く廣く世上に報告し東京富士見町四丁目甲九號  
華族櫻井忠興の郎中より有志者の寄附金を受理し  
直に戦地へ廻さん後より大給佐野兩氏の懇請に依り二品  
勲一等東伏見嘉彰親王ハ博愛社長とあらせ給ふされ此

盛事、忽四方へ廣がり、椽木縣下那須郡第三大区より寄  
附金并左の文を寄せらるなり、

遙に聞く佐野常民大給恒二君博愛社設置の美舉なり、  
と迂生輩の如き那須曠原中の野人と雖も感激不堪なる  
なり、今や西海の毒烟既ふ五旬ふ及ぶ其消滅近き存在と  
雖も幾多の傷者なり、ん事計るに、縦令東方の  
寒地もあり、偶戦地の形狀を聞くも、豈茫乎とて拱  
手さす時なり、んや抑報國の義志ある人の戦地病院に  
依頼し、綿織絲其他の物品を贈ると聞く、迂生ども  
聊其念慮を、此より、さすども、遠隔の地あり、如何

とも爲と能をも今貴社博愛の美譽あるに遭ひ歡喜の  
堪ど卑陋を顧み別紙此少の金員を以て盛大無疆の  
用度不加ん事を冀望を實に蒼海の一滴たりと雖も微  
志洞察ありて嘉納せしめん事を請ふ頃首

明治十年

椽木縣下野國那須郡

七月

第三大區拾小區

陸羽街道蘆野宿

加藤三平

戸村謙橘

博愛社御中

この寄附金よ加たる者へ何れも那須郡第三大區の人々お  
く蘆野宿の白居小四郎、大平量三、大塩清嘯、伊王野村の  
沿井彌太郎、大島村の醫師杉江昌菴等なり、其外又珠  
勝ちつゝ越後國の歸山徳三郎あり、此人の鹿兒島の事件  
おつても何れ相應の御用を勤むれば日を願出さんとて、遙々の  
旅路を経、東京より止まらば、國許ありて考へ事情と  
いふ大なる相違あり、思の外穩ありければ大に安堵し、自費より  
従軍を願出せし未だ許可を得ず、其中折悪く持病は閉  
られ、故にゆくに従軍は望も絶え、空しく故郷へ歸らんと  
せしが、何れも残念と思ひ責て、従軍の人々へ品物な

りとも贈らん者と、太白砂糖百斤と草鞋三百足を軍人に贈らん事を願出せり、早速御採用有ければ、徳三郎は雀躍し悦びし。

川路少將の軍鹿兒嶋へ連絡する事

前説するが如く、川路少將の手は六月廿一日に於て將士奮戦して、宮の城の賊壘を奪ひ本營を此に置ければ、同廿五日より、又進んで入木は本營を置け別働第三旅團第五番大隊と進んで鹿兒嶋に向つて入り、第五番大隊は鹿兒嶋街道より、凡そ八里を行く道と左に取、鹿兒嶋城の後を當れるサイ原に出、敵の後を突つて、賊

兵はうら有べしと、夢も知らぬ油断を究り、所あれど、皆狼狽し逃去せり、官兵は逃るを追、数箇所の軍營を奪取り難お、鹿兒嶋城よりと達し、けれ然るも賊は已に従來の故郷より、兼て地理よく精ければ、且は官兵が陣取る山を廻り、官軍の背に出、後陣を取圍、洩さずと攻立しを以て、官兵も殊の外苦戦あり、此一戦より後と取り、鹿兒嶋の官軍は連絡を以て、数日の辛苦水の泡と成るべしと各踏止む血戦となり、賊は遂に散々打あやれ吉野とて、逃走せり、此手の官兵は前日より鹿兒嶋に在勤せる河村參軍の命を奉り、此日乗取ると胸

壁ハ皆四旅團ヲ讓渡シ、隊伍ヲ整ク、鹿兒島の城下ニ入り、  
正ニ午後第七時ありしといふ、尤此の如く、首尾よく鹿  
兒島城ヲ達シたるハ、兼ク當地ニ出陣セル河村參軍以  
下ニ諸將士去ル廿二日、重富より兵と廻リ、礮山ニ賊と  
追拂ヒ、同廿五日、又奮戦シ、竹村の賊と追退け共ニ力  
と盡シ、故あり翌二十六日より、鹿兒島在勤の警視隊  
第二大隊と以テ、宮の城ニ川路少將の隊へ遣シ、此手は々  
と迎シ、めたり、斯ク賊の巢窟も大概知れ且三浦少將の率  
たる手とも既ニ連絡と通シ、ければ、曾我少將の旅團前ハ  
鹿兒島あり、  
三浦少將の旅團是亦曾我少將  
たるもの也、高島少將の旅團の隊とあつた

川路少將歸京の事

と都合ク、七月三日より、己ニ都の城ニ向ク、志布志迄  
進入セリ、  
叔も陸軍少將兼大警視川路利良が、鹿兒島へ連絡セテ後  
ハ最早賊の根據ある薩摩も、一圓官軍は有となり、賊は勢  
日々は蹙リ、西討ハ全局を終る事近キリ、何れも此上ハ已  
ク本分ハ職掌ある、全國の警察は著手セラレ、川路  
少將ハ早々支度と調ヘ、七月三日午後第三時、西京著  
されければ、大臣參議方ハ七條ある停車場より、出迎ハ  
且川路少將ハ停車場より、馬車ニ乗移リ、直様行在所へ





の模様と  
奏聞の圖



川路少將  
繪圖面と  
以て戦地

参内せられ 主上は御機嫌伺はれり。主上は特は御  
 悦淺からば、川路を御前へ召させられ、畏くも長は出  
 陣特り大儀の 勅語を賜り畢く御酒肴を下賜り、翌  
 四日よ、再び御前へ召され戦地の模様委曲奏聞致さく  
 様又々 勅語を蒙りければ、川路の繪圖面を開き、某地の戦  
 みろ、何番は隊此山を廻り敵の背より出で、賊の砲壘を乗取  
 り、某地より味方入り危うく、が萬死と出で、一生  
 と獲るるも、其外山々は險阻土地の風俗海岸の模様  
 迄事細く實地の景況と奏聞ありしに、天顔殊より  
 且戦士は艱難辛苦と思想ありせられ、川路は

勅命の忝きと感拜し、惶懼喜悅と退散せられぬ夫より  
 七月九日は川路警視少將も、西京と打立れ警部大山綱昌  
 宮内盛高と共に、東海道と陸行し、同十一日は駿河の静岡  
 驛へ到着し、翌十二日ほど程谷驛に泊せられ、同十三日も、  
 別仕立の瀛車より、午前十一時五十分東京新橋の停車  
 場まで著されける。此時岩倉右大臣大隈寺嶋の兩参議と  
 始り、文武の官員數多出迎せられ、共は太政官は参官せ  
 られ、軍陣の勞を慰せられ、此時先日凱旋せし一大隊と非  
 番の巡査は皆沿道の左右に整列せり、折しも浅井陸軍少  
 佐は、新撰旅團の一大隊を率ゐる習志野より歸らば、鍛

治橋より川路大敬視の歸京お出會へば直様川路を護衛せり、當日宮内省より慰勞と酒一樽交有、五種家鴨二羽を贈られけり、

官兵薩摩より日向大隅を侵入せし事

川路少將が歸京は後、降参せし者日々多く、六月二日、加治木に於て賊の行進隊二百餘名、第四旅團を降せしむ、又迫田少佐の手は三十餘名降せしむ、加治木より西南の方へ宇都宮中尉の手は歸順せり、三浦三好の兩少將は、六月三日、本營を溝邊に移し、同七日より三好少將が率ふる第二旅團と田邊中佐の隊とを合併し、跳より

霧物鳥山の麓をきり、出發せり、又此日、第四旅團は國府迄軍を進め、此所は本營を移し、翌八日、高島少將の手は高隈陣と薩摩の東方を略し、國府はあつた山曾我の二少將の手は合んと欲し、勇進してモヒキとつた所を至り、其手の一中隊は遠く賊の爲に挾撃せられ、計りきり苦戦し出逢ひ大にお敗れ、歸來し者五六人あり、其餘は賊の劍銃を斃さん、或は山中に隠れ入り、其行方知れず、者多し、又此手の戦線は長さ殆ど十里あり、之が爲に配布の兵甚少く、一里方面は二百人、過ぎりければ賊は此勢を探知し、六百人を一團とあし、六月十日

大津平佐の兩所小押寄無二無三小砲發し高島  
 少將の戦線を突破んとせり官兵ハ必死と防戦せんど  
 も賊の三分一も足ざる兵卒せんば残念にも平佐の官兵  
 を引揚るゝ又三浦少將の手ハ七月七日ハ跳村を占め大  
 久保へ五中隊霧島の神集館へ一中隊鹽浸安樂へ三中  
 隊と出く攻撃せしむ大久保より國府及び襲山の殘賊  
 大ニ集合し其衆我兵ハ十倍せり官兵も透さるゝ兵員を増  
 し此日の十二時頃より同八日午後四時迄絶え戦を挑し  
 大山少將の六小隊も來り大久保の横を衝き左右より微  
 塵もさんと攻立りれば流石の賊も大ニ辟易しし背の山へ

逃去まり明きの九日早朝より勢ふ乘りし攻撃せしむ  
 午前十時遂に大久保の後背なる山上の賊を逐拂ひ又神  
 集館の賊を一掃しし飯野花越迄逐撃し其隊の右翼  
 を以て炭山は備へ左翼の霧島山の半腹今二道ハ小林を通  
 る間道と塞ぎ七月十一日ハ本營を國府へ移されり翌  
 十二日ハ大溝原村より賊壘を攻撃し六時半ありし諸  
 壘を陥し右翼の兵ハ平島神社より田代迄進み賊壘數  
 百を乗取りし賊ハ觀音越并平島越より小林に向て遁  
 走し官兵ハ踏込し逃るを追り横大嶽に至り此山  
 ハ飯野と小林の界あり此ハ來り時ハ十二日の午前八時

かり、因て本營を飯野へ移せり、先小人吉口より進たる  
 山田少將の昨日第二旅團の三好少將と兵を合せ、飯野の  
 前面なる賊を攻め、午前九時、遂に賊を逐拂ひ、翌十二日小  
 猶小林へ攻入り、賊の前夜、小林を焼拂ひ、逃匿せり、跡  
 たりけり、又大山少將の一手に大隅國國分本營を居ら  
 せしが、六月十二日、兵を出し、根敷を取らり、此時可笑  
 しき話あり、一人の怪しげなる男、一封の書状を携へ、馳來  
 り、急報々々と言ひ置去り、書状を取開き見ると、よの  
 そもつらふ、官軍本營より、報書あり、あはれ、遂に、賊營の  
 號令書なり、其大意、一先引揚べり、との趣旨なり、此地の

今日より、賊將の持場なり、故倉卒の間使が本營を取  
 違はれ、者なきべし、同十四日午前二時、賊徒等別働隊  
 第三旅團の不意を撃んと、荒磯山へ押寄來り、官兵  
 の防禦案外、整を見、忽ち引去り、四時頃再び押來り  
 が、暫くつらふ復引退あり、官兵は少く、疲勞を休め、心を  
 安ん、居り、一處へ午前六時頃、至り、賊等凡八百人  
 許り大舉と押寄來り、銃を發つこと、兩は、の、今度へ  
 以前、變り有様、其勢止め難、警視隊、曾我少將  
 の第四旅團へ、應援を請んとせし、ら、賊へ却て官軍の  
 側面へ廻り、二手へ分ち、攻立、官軍の勢一時、既よ

崩んとせし漸く旗色を立直り辛く前及び側面の敵を追退けたり是賊の策略に急り之を撃つ方便と考へ者なり同十五日賊兵一人警視隊の哨兵線ふ来り眞實の降参り言述其後より俄に數百人の賊徒物をも言ひを突来る官兵も折よく警備嚴重かりけし難く敵を追退けたり若彼等が策略其圖小當らば官兵の大なる敗衄を取べきなり賊軍は此方畧を以て山田少將の手へ斫入たる事あり又此日曾我少將の手あく生捕る手負の賊は號泣し命をけりか助け下されと呼ぶ其手の士官の言けりや賊兵の汚きる

衣服を纏ひ破きたる器を携ふ若命を奪はざる時我に於て取べき者なり一笑せり又此隊の士官降参人小問て曰く賊中あく官兵の多少を知や否と降人少く首を傾く答けし官兵の圓とつゝ者があり其圓が七つありと聞及べると益々賊中への旅團の團を圓と誤傳せし者なり官兵は此等の珍事を以て辛苦中の慰笑とせり

官軍奮戦し賊の巢窟都の城を陥る事

かく六月十五日の第三旅團三浦少將の持口へ賊勢あすこ襲来り此地は福山より一里七合なり山上の戦線

あゝ、樹木生茂り、林叢多く打續きをなれ、官兵の此  
 林を據り防戦せしが、賊兵八百人許、更守線の右翼を  
 寄せ、大砲一門を引上り、頻りに破裂丸を射發せしを以て、官  
 兵も亦巨砲一門を取寄せ、烈く賊兵を狙撃せしが、此手  
 の賊、其勢甚慄悍や、容易に退き難き様子なりけ  
 る。官兵の一手ハ、切ふ賊兵の後より、前後より挾撃を攻  
 立たり、之に依り、流石の賊も大に辟易し、散々あり、敗  
 走せり。此日降参入一名ありし故、賊兵は多少を問糺せし  
 り。此所を襲來せし、勢ハ千二百人ありし、然れども官  
 兵が戦争中、測り所ハ八百人は過びといふ、すく生捕一

人あり、此賊も足は傷を負ひ、逃去を得ず、官兵  
 進撃のつら銃鎗を以て、其頬を貫き、叩倒し、捕へしな  
 り。此人の年齢ハ四十四少く、佐土原の士族なりといふ。戦  
 畢、病院に入れ、此人を介抱せしが、此人悦ぶ事限りな  
 く、合掌して拜し、由あり、同十九日は、賊も八百餘人と  
 引率し、此手の官軍は迫り、左右の翼を張り、正面より大  
 砲四門を備へ、烈く官兵と射撃せり。官兵も手術を盡し、  
 之を防ぎ、正午十二時頃より、賊遂に敗衄し、高野街  
 道へ逃走せり。我兵は追ふと追ふと打惱せし、日暮も及  
 たるを以て、兵を舊線に引揚せり。此日官兵の死傷三十餘人

なりといふ今朝の事なりしが此手より分配せし霧島  
 山の麓なる神集館村へも又々賊兵が押寄來り守線の左右  
 より抜刀し切込み一時頗る激戦し辛くして賊兵と逐  
 退けるあり此手に戦争し即死三人負傷者二十人許なり  
 此三浦少將の手は最初熊本の戦争より引續く諸方より  
 轉戦し今は至り幾回たるを知らば夫が爲に軍中の壯士  
 多く戦死し今時一中隊と唱る者の僅に四五十人なりと  
 いくとも連戦し大軍は打勝く勇氣初は劣らざる事ハ  
 多く世人の稱嘆する所ありをとも又高嶋少將の一軍  
 は元來鹿兒島より船は打乗り賊の背向し出たる者多く

他の軍やをも全く隔絶し孤立無援は姿あるを賊ハ早  
 くも見知て無二無三は戦線は中央と切破り嚮ふ平佐は  
 破れしより續く百引邊し打破られ其勢四分五裂  
 とありければ引退し垂水は軍を收め猶賊兵が南部  
 へ逃るを防んが爲に六月十五日は海岸より海岸ま  
 で一直線は戦線を取り賊兵は通路と塞ぎたり此高嶋  
 少將は手へ馳向ひしる賊手は嚮は鹿兒島と圍たる振  
 武隊と稱する精兵多く死を見る事歸るか如く思は  
 る猪武者おれは其鋒の盛鋭ありし最謂ある事な  
 り是が爲に高嶋少將の手はありし會計吏一人を生



捕られ用金若干彈丸二萬箇と奪取られし。同十七日、  
 高島少將は打向ひける賊兵の漸く方向と轉し、三好少將  
 の手へ切入るありければ、高島少將の手へ是迄の苦戦を引  
 け、絶え戦と挑むべき敵あり、因る一丸を費さず、  
 同十九日、本營と成市へ移し進み、福山より出く別働  
 隊第四旅團と連絡を通し、此福山は元賊の本營  
 ありて、其本營の壁面は賊徒等、左の一絶を題し置  
 たりし。

襲來百萬關東兵

笑聽四面鐘鼓聲

西國男兒有心膽

只知有死不知生

同二十二日、又更ふ戦線を進め、恒吉を打入り、斯  
 て諸口の少將は各守線に依り、敵の襲來に備へ、毎戦勝  
 利を得、賊は巢窟都の城に近きたれば、此後の大挙し  
 り、賊窟を覆し上へ、敵慮を安んじ、奉を下り、萬民の  
 憂苦を拂ん、皆各國府に會合し、此度は少く進み、  
 又砲壘と築く等の策と止め、長驅し、都の城を陥し、  
 と集議一決し、七月二十四日の早朝より、三浦少將は  
 第三旅團は莊内より進み、曾我少將の第四旅團はトホリ山  
 より別働隊第一旅團、高島少將の手へ来吉より別働隊第  
 三旅團、財部より進み、此戦は將に結局と終んとす。

大切の戦争あれは將校士卒の勇氣平日は百倍、我劣  
 らしと死骸と踏越々々猛虎の勢を振、攻立ければ何う  
 へ以て堪るべき、午後二時頃ふへ、も名高き峻岨なる  
 都の城も忽ち灰燼となりて、賊兵等皆秋風よ木は葉  
 と散るの如く、右往左往は亂走れり、此日の戦へ第四旅團  
 の手最烈く、士官五人兵卒七十人の死傷あり、此時先士  
 族屋敷の中央ある、一家を以て假し軍團本營とす  
 したり、此所へ前日やを賊が二府廳とわ、出兵其  
 外種々の事件と取扱し、見えなく、書籍手翰など皆  
 卓机の上は散亂せ、其書類は中ふ偶左の如き者

とありたり、

区内病院 舊區長役所宅

右此際不容易世態一統軍事に付人役等多端の折柄、段  
 々卒病等も不致於醫家も藥種等及拂底一統困却り  
 及候段相聞得候、付別段詮議の譯有之爲救助一時假  
 病院と今日より相設け、病者療養方施行之筈、候間  
 以來病氣は向い右病院へ相付療養方致候様至急区内  
 一統へ可致布達候此段相達候也

但藥種の儀は夫々定價も有之候得共、此際限り別段之  
 譯と以て、壹貼、付平均五厘五毛宛め、即金上納可

致候尤水薬丸薬等の直段此限はあつは時之相場の直段と以て可拂下事

七月十二日午後四時

郡代所

此大家の向は舊の英學校あり前日早と賊之を病院や  
あし負傷者凡百人も入置しが今朝は敗と聞て此患者と  
他所は移せり然れども卒雨狼狽の際十人許り残り  
置り何れも一の房は兩人宛臥居りけるが院内不潔めて  
臭氣殊ふ甚しく又療養も行届せると見え傷所の唯  
布と以て纏はせあり又傷所は燼衝を引起し苦痛見る  
と思ひざる者あり之を慰て後刺官軍の醫員が必來て介

抱とて一言聞らむれども大は安堵の様子をおし深く禮  
と速多りの又薄手に傷と蒙らるる病人に向て患者は中  
み大將分は者らあつてしやと問ふ村田新八は太股を打ぬ  
とて昨夜中は院内はありしが今朝他所へ送られたりと答  
へり又其次の房に至りて見ると病賊一人自咽喉を突き疊二  
枚むり鮮血迸走し尚全くと死せんと醫員某は早速其  
傷所を縫合せければ少く言語を通じたる様はありたり又  
其外此牢獄は官軍の兵卒賊を捕りて者七八名あり官  
軍侵入の後直様救出せり此中よ出水邊の老人は其男が  
東京は巡査と奉職せる廉を以て獄を撃がれしが本營よ

於此老人と呼出—其男某引渡されれば老父の歡喜の餘り感涙を止り敢ざりしとつり、此日本營ふ於に諸少將集會—、更進軍の部署を定め別働隊第三旅團と同第四旅團の中少々を止り置く、市外数軒の地は哨兵線と張り、其他の旅團は各持口へと歸つたり、

聖上西京より還幸の事

〃〃〃〃賊兵は巢窟都の城も最早没落—賊勢日々窮蹙—、其滅亡近きとあれば、聖上も大宸襟と安ぞ、  
 七月二十八日よへ愈西京を御發轅あらせられ、夫より皇右宮と諸共御船召せられ、同二十日よへ横濱へ着御

ゆせらるるべし御日割めつるを、東京横濱とも御道筋の皆水と瀬と塵を拂ひ、戸毎に國旗と揚げ、還幸を待奉りたり、是時横濱の形況へ未明より、遠近の人民老を扶け幼を携へ、拜觀ふ出るもの陸續たり、神奈川縣より、港内各警署署長并に非番の巡查は残り、次午前五時と御道筋へ出張し、十歩毎に一人宛と兩側へ配置し、いと嚴重に警備せり、又停車場の前日より洒掃し、最清潔と極多り斯て波止場より、波間遙に眺むれば、其光輝旭日は映じ、御艦の影と認得たり、今〃〃〃待間程おき、御艦は同六時よへ着御あらせらるたりける、此時内外碇泊し軍

艦神奈川砲臺より祝砲と發したり、同六時五十分、東海鎮  
 守府へ御上陸樂隊樂と奏し、暫時御休息ありせられ七  
 時三十分同所御出門、此時又奏樂あり、御行列の先導ら、  
 神奈川縣警部川井久徵同一等屬磯貝静藏二三等譯  
 官柙原保太郎、全權令野村靖等あり、次は騎兵次り、  
 主上御馬車ふ召れ、東久世侍從長陪乘せり、次は 皇后  
 宮の御馬車夫より供奉の大臣參議勅任官數名御跡  
 警衛へ神奈川縣少書記官小島信民、全四等警部松嶋  
 美道等より、御道筋は元辨天通より、本町通り辨天橋と  
 御通行、全七時四十五分停車場へ御着より、暫時御休憩

ありせられ、八時五十分、氣車へ移り、給ひ同十分御發  
 車九時十分、新橋停車場へ御着、此時も樂隊樂と奏せ  
 る、全所の二階より、暫時憩せり、御茶菓あごと召上り、  
 全五十分御馬車よ召れ、敬言視官府廳官吏の御先導  
 より、順次と正し、御發轅續く供奉奉迎の皇族方  
 と始め大臣參議勅奏文武の官員、麿香間詰の華族  
 及び琉球藩は親方有位非役の華族迄、何れも馬車より  
 隨從し、御道筋は近衛兵鎮臺兵巡查等より、敬固し、同  
 十時二十五分、皇居へ著御ありせられたり、教導團樂隊  
 の樂と奏し、宮内省の官員は同御門外より奉迎せり、抑明

治十年二月二十四日、東京と御發車ありせられしより、今日迄ふく百八十八日の御駐輦ありし東京府下の人民は、日千秋の懐と爲り待奉りしが、斯く目出度、還幸ありしを、られしことを衆庶の歡喜限なく皆萬歳と唱ける。

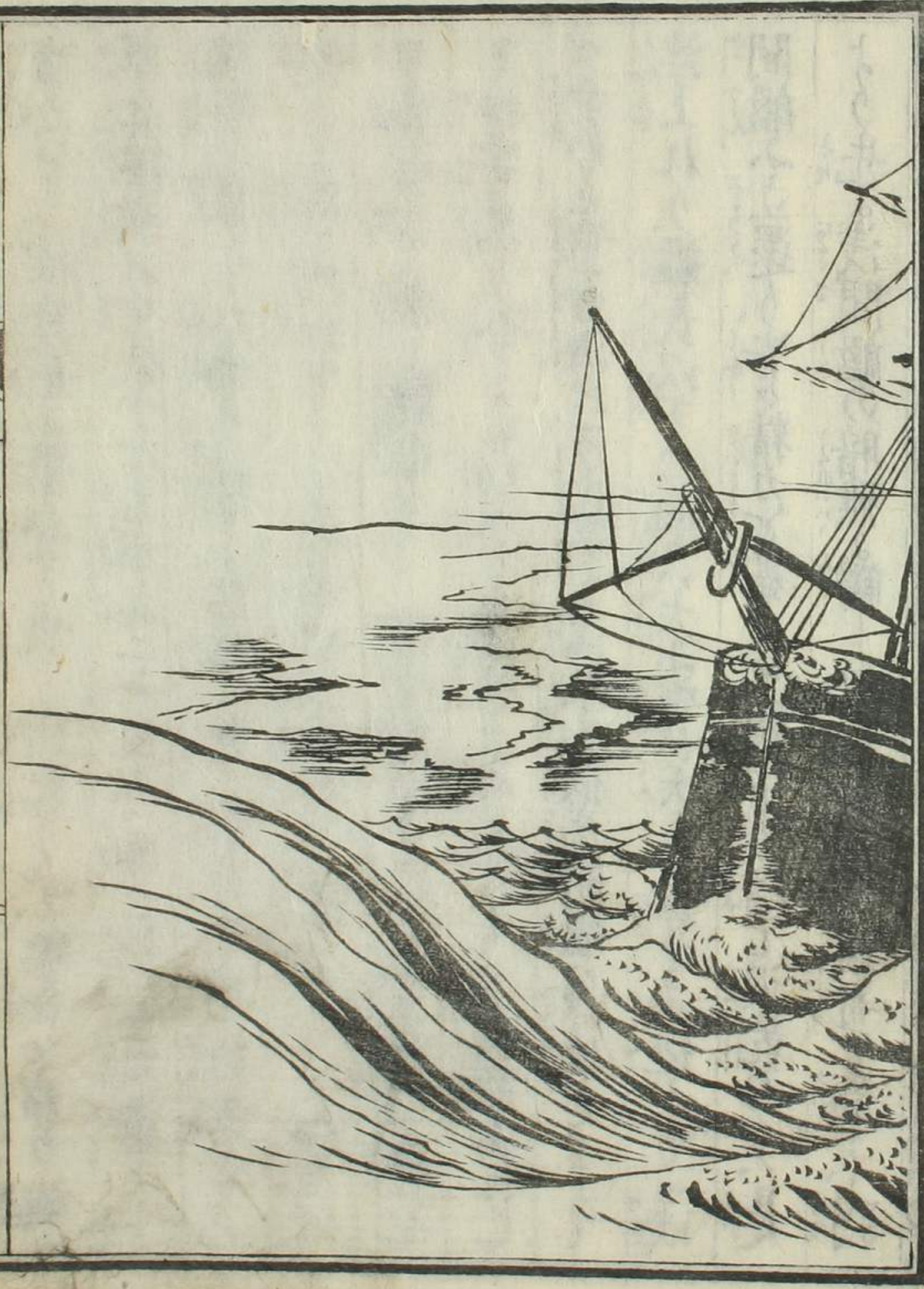
浅間艦日州外の浦ふ於て難船弁豊後肥後口は官

兵勇戰の事

却説く豊後の賊何如もしく、此手の官軍と打破し首尾よく四國へ押渡らんを、薩摩口及び肥後の人士より、却て精兵を集り、此手に官軍は抗敵より、故に諸口官軍は進撃を較れば容易く打破し難きも亦道理ありとを、

も浅間艦日進艦と共に陸地の官軍と接し白杵の賊と砲撃し賊徒の敗走とるに及り、白杵より八里先ある久津見より、押寄へ逃去る賊と横合より砲撃せり。六月二十九日午後三時、日州外の浦を過るとに、海風遠く吹起り打寄る波は左あがり山の湧り如く、其上烟霧朦朧と四方は立塞り船中の人たは判然と見かす難きやどありけるが、如何あるもつみや、忽ち暗礁に乗上げ艦中の響き轟々と雷の鳴渡る如く、俄りして艦底より潮水並入る、瞬息間に砲門や浸しけし、何とも詮方ある艦長緒方少佐以下は面々其苦心一が、あつて、今も敵を見付らざるを念らざる敗北を取ん

日向國外の  
浦に於て淺  
間艦危難の  
圖



事必せり、寧陸地ふ懸登り快く討死せん、艦長と始め海軍兵學校に生徒十七名水兵二十三人の聊う糧米を留意し、端船に乗る大島は上陸し、部伍を整て敵の来るを待受たり、然るも賊は何如と、よわ、此地は官兵は上陸せしと知り、日暮ふ至て漸く難船せし事と聞つ、已は大兵と引率し、押寄來り、今も切へ微塵も爲んとせし有様ありしが、幸ある哉、蒼海は汐次第に滿來て、彼淺間艦は漂然と、浮上れり、艦長以下の面々大に悦び、天も登る心地して、淺間艦も立還り、皆々精力を盡して、艦中の潮と汗乾たり、是より先は淺間艦の暗礁に觸り、やも、艦長は端舟を卸し、別

よ人と派し、佐伯灣のゆる日進艦を援とせしむ、偶此舟は順風を得、六月三十日の曉に佐伯灣に達し、日進艦の長と遇り、云々と告げれば、日進艦は直に錨を拔き、佐伯灣に出帆し、豊後の鶴崎沖より來り、こゝに思掛あつても、淺間艦も出會へり、是は於て互に真無事ありしと悦び、淺間艦の夫より豊後ある佐賀關の達し、大砲其他の物品と陸揚し、直様修復を取掛たり、茲は又陸地の官軍は白杵に賊と追拂ひ、續く勝地峠の戦事より未だ墓々として侵入も、ゆるりけるが、重岡口は賊の其勢今も屈せ、益々慄慄と、容易に討平ぐべき形況は、ゆるり、已に七月三四日は、兩日と、賊兵等精



銳と盡し、梓峠の右翼を襲来す。楯とも取らば、伏打入たり、  
 我兵の地理の不便あるを以て、據りて戦線と縮め、駒寄長  
 峯ふたぎに防戦せり。凡そ此賊手は向ふ官軍の熊本鎮臺兵  
 及び後備軍遊撃隊より、此遊撃隊は長州紀州より徵募  
 せしめ、兵あり、兵負凡六千餘人あり、本營と重岡より  
 置り、其戦線の海岸日豊の界ある黒澤より、始り石神越陸  
 地峠豆鼓峠赤松峠城の越黒土峠板戸山柳瀬木浦と經り、  
 桑原山は麓を接し、其間凡十四五里あり、其中黒土及び板  
 戸山の半面は其後北戦争の爲に奪とれしを以て、之  
 と取返さんとの事あり。七月二十六日午後第八時、官兵を

進み田代村より雉子山と渡り、兵と潜り板戸山は迫り賊  
 然不意と衝んとせしが、いづれも九折ある山坂より、艱苦と  
 凌ぎ漸く一の險山と超來れ、先路又一の險山あり、深夜中  
 特に案内も知れ、次官兵殆ど方向は迷はれ、暫く明月  
 小打對ひ休ひし折柄風を傳へ、遙か賊等が郷情を寄  
 せしむ清吟を聞得り、流石に敵味方ある官兵も彼埃  
 下は楚歌と懐出、賊等が命數の長きとせむと憂悲歌  
 慷慨とせむと憫れと思ひし者も有りぬべし、時二十七日  
 午前二時あり、官兵の不思議ある事より、賊の所在を  
 謀知れば、直に獅子奮迅の怒を現し、銃鎗を振る壘中より

跳入つゝ忽ち賊二人と突伏せり、賊兵其不意を撃ち、大に狼狽し、半は黒土峠の賊壘に入り、半は梓峠の賊壘を走れり。官兵は透さるゝ追うけ、漸次四壘を奪取せり。此時既に午前五時あり、折節城の越えわたり官兵も板戸山の開戦を見るや、否直に大砲小銃を連射し、黒土峠の賊を襲ひ、黒土峠は賊も仰視を板戸山の陥つと知り、戦をどろどろ引退けり。此重岡口は官軍の谷少將が率たる熊本鎮臺兵も、嚮て熊本の城中に於て、永日の戦場を經歷し、能く實地を鍛錬せりと以て、持て勇猛の聞えあり、去る六月十七日は豊後國三國峠を攻撃せし節も、軍曹川野邊常松始め外十六名の先登奮

戦々々々遂に賊壘を奪ひ、其功拔群あるを以て、此度征討総督より左の通り賞與を賜はせり、

目錄 金拾五圓 陸軍軍曹 川野邊常松

其方儀本年六月十七日、大分縣下豊後國三國峠を攻撃せし節、選抜衝突兵の司令申付る處、一丸と發せしめて、賊壘を突入り、壘内に賊十餘人と殺し、之が爲に各所の賊壘悉く敗れ、遂に重岡侵入の道を開き、全く衝突の功は出る段、征討総督の宮へ上申の上、褒賞として別紙目錄は通差遣候事

明治十年七月 陸軍少將 谷 干城

以下十六人賞褒を賜ふるが文面の中司令の二字あり

目録 金拾五圓 伍長代理二等卒内藤角平

同 同 朝見兵太

同 同 永田龜八

同 同 内村豊吉

同 同 高戸勝三郎

同 同 中村皆吉

同 同 赤星恒平

同 同 溝部加代五郎

同 同 千代田音藏

同 同 末吉市之助

同 同 下津濱休太郎

同 同 米永直助

同 同 木寄彌一郎

同 同 原七藏

同 同 酒井順平

同 同 田端多次郎

以上十七人が褒賞を賜ふる事よつて今暫く三國峠の地景と速人夫三國峠に登り一里餘りて極く險阻ある阪道なり。岩石峨々として一夫之を守れば百夫も進み難き所なり此地

三重市より重岡へ出る道筋あり、官軍が重岡へ本營を置れ  
 たる後日々兵糧輜重を牛馬を負はせ、此時を踰る、牛馬も其勞  
 は堪ざり、斃る事毎々あり、其險阻ある事推し知べし、斯  
 の如き要害の切所、賊兵等が精兵を集り、壘壁を堅く築き、  
 必死と極く支うると、僅十七人あり、攻登り、遂に此時を奪ひ  
 る、將校が指揮の宜きと出る、いづれも、抑又兵士の勇膽、  
 實に感とる、餘り、閑語休題、爰に又肥後口より進る官  
 兵、肥後の馬見原口より、日向の三田井通へ押出し、七月二十  
 八日頃、延岡より、僅六里半を隔る、舟の尾村に本營を  
 居る戦線と銅山七ツ山中尾胡麻山筋は張る、側面より延

岡は臨め、此邊の人民の舊延岡領、人心の大義を誤ら  
 ざる亦感ざる、堪ざり、先其證を擧ぐ、宮内より中村より  
 至る此間は日の影川といつる大河あり、川幅三十八間半は  
 て從來橋を架すと事あり、官軍の本營を舟尾村に  
 移され、より、輜重は運送は不便あれば、急ふ假橋を架せ  
 んと、最寄の山中より、竹木を伐出し、此邊の人民は、  
 此事を聞き、直様官軍の本營を出願し、多勢は人夫と聚て、僅  
 兩日の間に其功を竣じ、本營に於ても人民の殊勝あるを感、  
 早速賃錢を渡さんとせられ、人夫等に向て受付け、  
 此等の事の銘々は義務あれば、賃錢を受るは筋ありといひし

とて是迄肥後の馬見原より同國の人士は連續せる戦線の  
 其間米良越といふ大險阻あり此山の山谷疊重とて進  
 も人馬を通ずべき趣向なく官軍は警備も絶々あり先  
 頃第二旅團が飯野より小林高崎等と奪取り賊勢漸々  
 縮小して防禦の警備も十分は行届ければ別働隊第二旅  
 團の現時遊軍の姿をかり因て此兵を以て先人吉を引揚  
 げ夫より直に米良越を進みたり此手の右翼は大隅の官軍  
 は連絡と通じ左翼は舟の尾の第旅團は連絡し時機よよりて  
 は日向に中央と攻撃んとは勢よく諸口の官兵皆楕圓形  
 の連絡し殆ど盆中仕魚の如く今も死滅せんとする勢

あれども彼も名高き西郷なれば又何如ある謀畧と施を  
 やとち次の巻を見よ知べし

近世太平記四篇卷之上終



